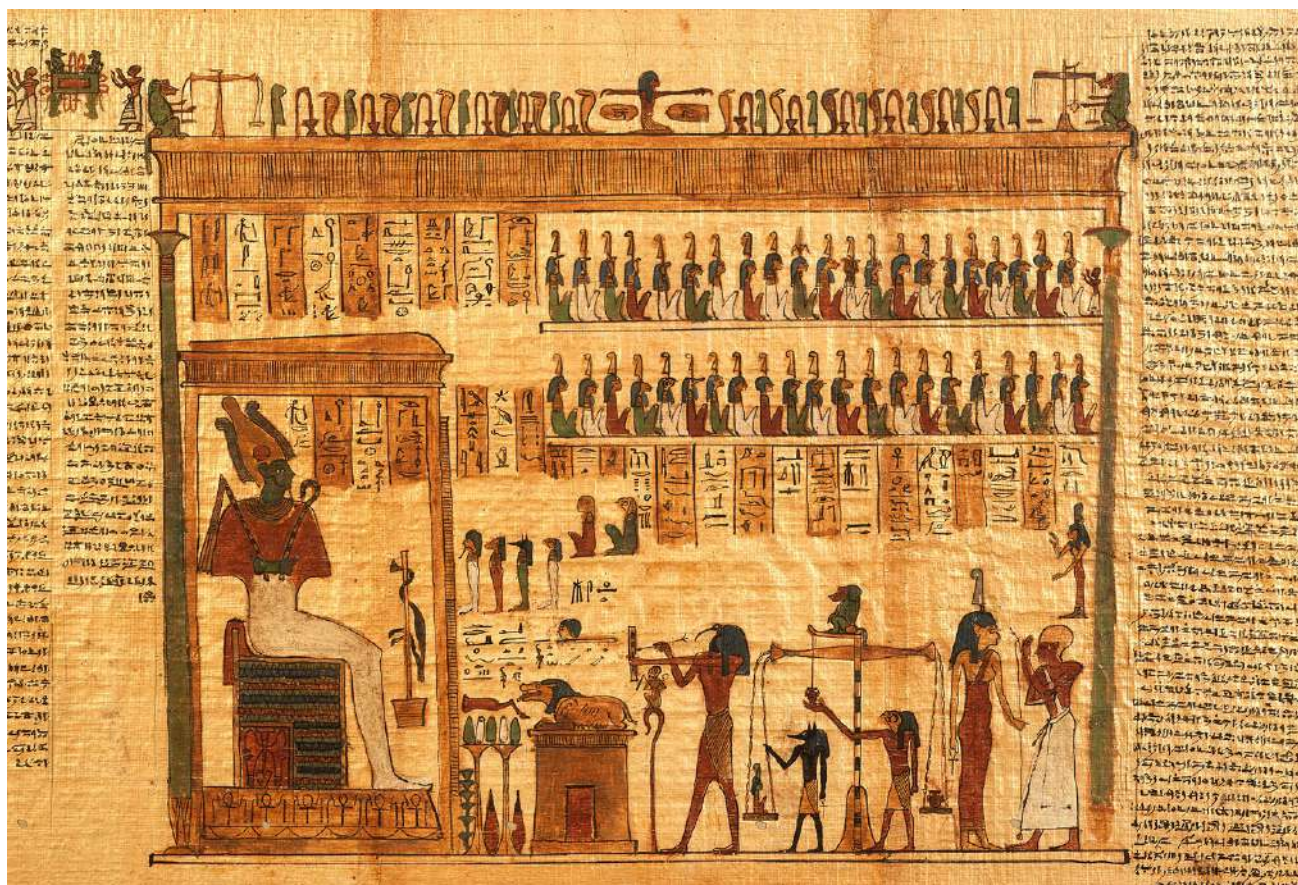

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 61

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1201. ライデン訪問記:ある街の古書店での出会い
- 1202. 『成人発達理論による能力の成長』:発達科学のリテラシー向上と言説空間の確立
- 1203. 夏季休暇の三日目より
- 1204. 白銀に輝く不気味な夢
- 1205. 作曲実践を通じた「自由と制約」への気づき
- 1206. ヴァン・ダイク教授との面会より
- 1207. サンタクロースを信じる多くの大人たち
- 1208. 記号に呪縛される私たち
- 1209. ライデン訪問記:「スピノザ記念館」を訪れて
- 1210. 発達・学習と無意識:インナ・セメツキーの論文より
- 1211. ブラックスワンとバグ:個人と集合の発達に不可欠なもの
- 1212. 夢の世界から無の世界へ
- 1213. ミサ曲の感動と型について
- 1214. マルチフラクタルトレンド除去変動解析と埴谷雄高著『死霊』
- 1215. 倫理的・道徳的判断を迫る夢
- 1216. 偉大な社会学者から
- 1217. バッハのシンフォニアより
- 1218. 夢とエジプト
- 1219. 調停者と意味の喪失感
- 1220. 生きること・探究することの根源

1201. ライデン訪問記:ある街の古書店での出会い

今日は、午前中から午後にかけて行わなければならない雑事があり、それを終えてから、再び昨日のライデン訪問について回想していた。

国立古代博物館を後にした私は、すぐさまスピノザ記念館に向かおうとした。なぜなら、ライデンからフローニンゲンの街までは電車で二時間半ほどかかるため、夕方にはライデンを出発しなければならなかったからだ。しかし、国立古代博物館のある通り沿いを歩いていると、ある店の前で、一人の男性がサンドイッチを食べながら窓越しに何かを覗いていたのを見つけた。その男性の方に近寄ってみると、窓を通して、中に陳列されている数多くの書籍が私の目に飛び込んできた。

スピノザ記念館に向かって急いでいたのだが、どういうわけか私は、窓の外で足をぴたりと止め、店内に入るわけではなく、窓に面した形で陳列されている書籍を店の外から眺めていた。すると、面陳列されたある一冊の書籍が目に飛び込んできた。それは、“The Egyptian Book of The Dead”という書籍だった。その書籍は、見たこともない大きさであり、私の書齋にも、このような大判の書籍は一冊もない。

その書籍の表紙の絵が不気味な魅力を放っており、タイトルにも非常に惹かれるものがあった。というのも、先ほどの博物館で、古代エジプト人の死生観について多大な興味を示している自分がいたからである。この本への興味から、私は古書店に足を踏み入れることにした。重たい扉を開き、中に入ると、店主の姿はなく、ラジオがかかっている音だけが聞こえてきた。

店の奥の方に店主がいる気配を感じ取っていたのだが、店主は一向に表に顔を出さずことはなかったので、私は店内の書籍をくまなく眺めていた。どうやら、そこは思想書や宗教書、さらには民俗学の専門書を中心に扱っている古書店だとわかった。私はスピノザ記念館に行く必要があったので、急ぎ足に、全ての棚に置かれている書籍の背表紙を眺めた。すると、いくつか興味深い書籍があったのは確かだったが、私は古書店を後にする決心をして、店の外に出た。

店の外に出ると、私はスピノザ記念館までの道のりをもう一度携帯で確かめようとした。すると、古書店の店主が店の扉を閉め直した。どうやら、私はドアをしっかりと閉めていなかったようだ。携帯の画面から目を離し、私はもう一度、古書の陳列棚に目をやった。

すると、“The Egyptian Book of The Dead”という書籍に呼ばれたような気がした。その瞬間に、私はその書籍を購入する決断をした。もう一度書店のドアを開け、私は再び書店の中に入った。すると、今度は店主がカウンターに顔を出していた。

私:「すみません、陳列棚にあった“The Egyptian Book of The Dead”の中身を見せていただけますか？」

店主:「わかりました。こちらです。ただし、非常に大きいですよ。ああ、その版以外にも、こちらの大きさのものもあります。」

私:「どうもありがとうございます。」

しばらく私は、店主に勧めてもらった二種類の書籍を読み比べていた。やはり、陳列棚にあった、イラストが豊富な大判の方が魅力的であったため、そちらを購入することにした。カウンターにその書籍を置き、それを購入する旨を伝えてから、私は再度、店内の棚を見返した。すると、ジャック・デリダとミシェル・フーコーらの興味深い書籍を発見した。

しかし、それらはここでしか買えないものではないため、中身を一瞥したものの、それらを購入しようとは思わなかった。だが、それらの書籍が置かれている棚の左端に、“Society and Spirit: A Trinitarian Cosmology (1991)”という古書を発見した。目次を確認し、中身をパラパラと眺めた瞬間に、これは購入しなければならないと思った。結局、私は二冊の本を購入することにした。この書店に二度出入りし、随分と多くの時間をそこで過ごしていたように思う。

店主に挨拶をして書店を後にした私は、重要な書物との出会いに感謝をしながら、意気揚々とスピノザ記念館に向かうことになった。2017/6/21

1202.『成人発達理論による能力の成長』:発達科学のリテラシー向上と言説空間の確立

今日は、一日の多くの時間を使って、昨日のライデン訪問について振り返っていた。随分と書き留めることがあり、実際に多くのことを書き残したのだが、それでも今日一日だけでは書き残せないことが多々あることに気づいた。明日や明後日、さらには、それ以降も折に触れて、昨日の出来事について何かを書き留めていきたいと思う。今日はいつも以上に文章を書くことに時間を充てていた

ためか、書斎の窓から外を見る機会がほとんどなかったように思う。今、夕食を摂り終えて、ようやく窓の外を眺めるといった具合である。時刻はすでに夜の八時に近づいているが、辺りはまだ夕方のような景色である。

夕方のそよ風が、木々を優しく揺らしているのが見える。仕事や学校から戻る人たちの姿もちらほらと見える。そうした景色を眺めながら、第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』について改めて考えていた。未だに、本書を通じて表現しなかった主題を探すようなことをしている。

本来であれば、主題を設定した上で書籍を執筆していくべきだと思われるが、書籍が完成した後になって初めて、隠れた主題が浮かび上がってくることに気づかされる。そうした隠れた主題について、これまで少しずつ書き留めていたが、今日は新たにもう一つ、主題と呼べるべきものを見つけた。それは、本書を通じて、私は人間の成長や発達に関する多くの方のリテラシーの向上に寄与したいということだった。実のところ、成長や発達を取り巻くリテラシーの欠如に関しては、あまり悠長なことを言っていられないように思われた。

先ほど、これは隠れた主題だと述べたが、そうした思いからよくよく本書を読み返してみると、冒頭の「はじめに」の文章の中に、この点について間接的に言及している箇所があることに気づく。やはり、発達科学に関する知見というのは、日本にほとんど入ってきていないというのが現状である。それはもちろん、発達科学の知見の大部分が英語空間で構築されているということが大きな理由だろう。

発達科学の現場では、日進月歩にその知見が蓄積されているにもかかわらず、それが世の中の多くの人に知られることはほとんどない。ある種、そうした知見というのは一部の専門家の所有物と化しており、成長や発達に関する「知の独占化」が生じているとみなすことができるだろう。発達科学における知の進展というのは、それが日々着実に進行しているがゆえに、まるでサハラ砂漠の砂漠化の進行に様子が似ているが、実際に日本で紹介される知というのは、砂漠の中の一粒の砂に過ぎない。

こうした状況は刻一刻と悪化しており、知の進展によって、成長や発達に関する情報は日進月歩で増加しながらも、知の独占化が生じているがゆえに、それらは一部の専門家の中で閉じられたもの

になってしまっている。そうした状況を少しでも改善するべく、これまでの発達科学の歩みと現在進行形で行なわれている発達科学の歩みの中に本書を据え、とりわけ重要な情報を共有することを意図して本書を執筆した。さらに、それに付随して問題視していたのは、人間の成長や発達に関する現在の言説空間の脆弱さである。あるいは、そうした言説空間の未成熟さに危機感を抱いたというのが正直なところだ。言説空間の未成熟さは、人間の成長や発達に関する正しい知識と、一定程度の知識が不足していることに要因の一つがあるだろう。

成長や発達に関して、何か目新しい発達理論や実践方法を紹介するのではなく、そもそも成長や発達に関する議論や実践をするための土壌を構築することが急務だと思われたのである。まさに、今の日本で欠けているのは、そうした土壌であるという強い認識があった。仮に、そうした土壌がない中で、成長や発達に関する議論や実践を積み重ねていくことに何か意味があるだろうか。確固とした土壌がない中で行われる議論や実践をいくら積み重ねてみても、それは砂上の楼閣に過ぎないのではないだろうか。

特に、私たちが議論や実践をする対象というのは、人間なのだ。人間の知性や能力なのだ。そのようなことを考えると、なおさら、確固とした土壌のない中で議論や実践を積み重ねていくことは、非常に問題があることだと私は思う。そうした意味で、成長や発達を取り巻く言説空間を確立していくことが、今の日本に求められることだろう。

そして、そうした言説空間を構築していくためには、一人一人のリテラシーを向上させていくことが不可欠だと思ったのである。そうした問題意識から、成長や発達に関するリテラシーの向上に少しでも寄与することを願って、本書を執筆したという背景がある。2017/6/21

1203. 夏季休暇の三日目より

夏期休暇に入り、二日目経った。確かに、大学関連でこなすべきことがほとんどなくなったという点においては、夏季休暇の様相を呈している。しかし、この二日間において、自分のなすべきことに対する姿勢については何の変化もない。一昨日は、南オランダのライデンという街に観光に出かけたが、それでも自らの進むべき方向を絶えず確認しながら歩みを続けていくという姿勢には、何らこれまでと変わることはない。

昨日には、午後から夕方にかけて雑事があったのは確かであるが、それ以外の時間については、これまでと全く変わらない形で一日を過ごしていたように思う。今日も、これまでの流れを汲んだ日にしたい。具体的には、午前中にまずは教育哲学者のインナ・セメツキーの論文を三本ほど読む。その後、ダイナミックシステムに関する論文をいくつか読み進めていきたいと思う。

今年の九月からのプログラムについて確認しておかなければならないことがあるため、昼食後、大学の学生支援課に足を運ぶ予定である。その足で、社会科学キャンパスに行き、マライン・ヴァン・ダイク教授と面会する予定だ。先日、私の方からヴァン・ダイク教授にメールをし、教授が参加する予定の「ジャン・ピアジェ学会」について質問をしていた。今年の六月の二週目に、サンフランシスコで開催されたこの学会は、私もサスキア・クネン教授から話を伺っていたので大変関心があった。

クネン教授から、フローニンゲン大学からはちょうどヴァン・ダイク教授が学会に参加するということを知っていた。ヴァン・ダイク教授は、前の学期に「複雑性とタレントディベロップメント」のコースを履修していた時にお世話になっており、とても親しみやすく、かつ、親身な指導をしてくれる教授だ。

「ジャン・ピアジェ学会の様子はどうだったか教えて欲しい」というメールを送ると、ヴァン・ダイク教授の方から面会の申し出をしてくれた。私は単に、メールで感想を聞こうと思っていただけだったが、わざわざ面会をしてくれるという厚意に感謝をし、本日の午後から教授の研究室に足を運ぶ。そこでは当然ながら、ジャン・ピアジェ学会でどのような発表が行われ、ピアジェの理論に関心を持つピアジェ派や新ピアジェ派たちが、現在どのような事柄に関心を示し、どのような研究手法を活用してその関心事項を探究しようとしているのかを中心に話を伺いたいと思う。

今回の学会がサンフランシスコで開催されたという都合上、学会の話よりもまずは先に、サンフランシスコの街に対する感想を教授に伺うことになるだろう。私自身、サンフランシスコに二年半ほど住んでいたため、サンフランシスコの街には大変思い入れがある。しかし、四年前にサンフランシスコの街を離れて以降、一度もサンフランシスコを訪れていないので、現在の街の様子は気になるところだ。サンフランシスコの話、学会の話をしたところで、もう一つ私が気になっていることをヴァン・ダイク教授に質問したいと思う。

それは、ダイナミックシステム理論をはじめとした、複雑性科学を教育に活用することに焦点を当てた学会、もしくは完全に焦点を当てていなくても、複雑性科学と教育を架橋する論点が扱われうる学会の存在について尋ねてみたい。というのも、これまで調べてみたところ、めぼしい学会を見つけることができずにいたからである。欧州もしくは北米の地域で開催される学会の中で、そうした関心を持つものがあるのかどうかをヴァン・ダイク教授に尋ねてみたいと思う。

ヴァン・ダイク教授は、まさにダイナミックシステム理論を教育研究に適用している経験豊富な研究者であるから、その辺りの学会事情には精通していると思ったのである。今日の午後からの面会は非常に楽しみだ。20176/22

1204. 白銀に輝く不気味な夢

「清澄な恐怖心を催すような夢」と表現するのがふさわしいであろう夢を昨夜見た。それは、非常に陰鬱かつ残虐な内容の夢だったが、陰鬱性と残虐性が極度に濃縮しているがゆえに、不気味な清澄さを持つ夢だったとすることができる。

夢の中で私は、中国の農村部にいた。その農村部は、昔ながらの生活様式としきたりを踏襲しているながらも、村の一角に一つの近代的な建物があつた。それは一階だけの建物であり、鉄筋で作られていた。村の他の建物は、全て木材で作られているようであつたから、鉄筋で作られたその建物はひととき異彩を放っていた。

村の村長と私は面識があつたようであり、村長の案内のもと、その建物の中に入った。建物の中に足を一步踏み入れた瞬間、背筋が凍るような感覚があつた。それはこれから目撃する光景の予兆であり、戦慄の伴った感覚だった。村長の後ろをついていく形で、私たちは建物の奥の方に向かつていった。

一階だけしかないこの建物のフロアは広かつた。だが、フロアの左右に各々二つほどの個室のトイレがあるだけであり、フロアの真ん中には何もなく、少し大きめの四つのトイレがあるだけの建物だった。フロア内はどこもかしこも、白銀色を放っていた。それは美しく輝いているような色では決してなく、鈍く鬱蒼とした色であつた。

村長の後ろをついていく形で建物の奥に行くと、中年男性がそこにたたずんでいた。村長と私が目の前に来たところで、その男性は「ちょうどいいところに来られました。今から始めます」という言葉を静かに述べた。その言葉を述べた男性の表情に笑みはなく、それは無表情と形容できるものだった。何が始まるのか皆目見当がつかない私は、村長に「何が始まるのですか？」と尋ねてみた。

すると、村長は「ああ、知らなかったんですか。ここは、囚人の人体の一部を切り取るための場所ですよ」と述べた。その表情は、先ほどの中年男性の表情とは打って変わり、不気味な微笑みが小さく混じっているように見えた。

死刑を執行するのではなく、人体の一部を切り取るという残虐な行為がこの場で行われるということ、私は信じるができなかった。しかし、信じる信じないの問題について考える間もなく、四、五名の囚人たちが、監視員に連れられて建物の中に入って来た。それら囚人たちの性別に偏りはなかったが、先頭を歩く女性の姿がこれから始まることへの恐怖を私に引き起こした。

囚人たちが建物の奥に向かって歩いている最中、横にいた村長は私に向かって、「あの個室トイレの中で、片足を切断するんです」と小さく呟いた。私は、村長に向かって何か質問を投げかけようとしていたのだが、すぐに言葉が出てこなかった。すると、体を清められた囚人たちが個室に入っていく姿が見えた。

物音ひとつせず、叫び声のひとつも漏れてこない形で、「それ」が行われた。囚人の到着から個室への移送、そして刑罰の執行までの時間があまりにも短かったため、私はひどく当惑していた。村長は、片足を切断することを「刑罰」とみなしていたが、私には、何らかの「実験」のためにそれを行っているように思えた。ことの進行が不自然であり、刑罰の執行よりも非人道的かつ残虐なことが行われているという感覚が私の内側にあった。

そうした感覚が内側に流れた時、私は一瞬目を閉じた。再び目を開けてみると、個室のドアが全て開いていた。村長の後をついていく形で、一つ一つの個室の中を見た。すると、懲罰執行後のトイレは、何事もなかったかのような表情を見せていた。血のようなものは一切なく、ただ白銀の不気味な色だけがそこに輝いていた。その輝きに飲まれそうになったところで、私は夢から覚めた。

目を開けてみると、太陽が昇り始め、いつもの起床時間と同じ時間帯であることがわかった。しかし、私はもう一時間ほど眠りにつくことにした。そうしなければならぬような感覚が内側にあったからだ。

2017/6/22

1205. 作曲実践を通じた「自由と制約」への気づき

昨夜の夢はひどく残虐的であり、戦慄を催すような内容だった。しかし、夢から覚めてみた私は、何事もなかったかのように、初夏を思わせるフローニンゲンの爽やかな朝に同化していた。優しい朝日が辺りを照らし、そよ風が繰り返し繰り返し過ぎ去っていく。そのような様子が書斎の窓から見える。

早朝から仕事に取り掛かると、書斎の窓に何かぶつかる音が聞こえた。窓の方に視線をやると、愛らしい小鳥が窓からこちらを覗いているのが見えた。私は、このような形で小鳥と鉢合わせることを全く予期しておらず、とても幸せな気持ちになった。その小鳥はピョピョと鳴きながら、顔を小さく左右に振り、それでいて部屋の中にいるこちらを見ているかのようにであった。

その仕草は愛らしく、いつまでも眺めていたいと思わせるほどであった。だが、そうした思いとは裏腹に、その小鳥はどこかに飛び去ってしまった。飛び去った鳥の後に残っていたのは、小さな感動と幸福感が通った跡だった。感動と幸福の痕跡が、確かに自分の内側に刻まれていることを感じた。仮に、こうした感動と幸福そのものが一過性のものだとしても、それが通った跡は永続的なものなのかもしれない。そして私は、一過性の感動や幸福だけを感じるのではなく、それらの通った跡が作り出す永続的な感動や幸福に触れたいと思った。

昨日から、最終試験の準備で少しばかり離れていた作曲の学習と実践を再開させた。最終試験の準備に取り掛かる前に、ちょうど音楽理論や作曲の基礎に関する書籍を三冊ほど読み終えていたので、昨日から本格的に、“Composing Music: A New Approach (1980)”というより実践的なテキストに取り掛かることにした。

これは以前紹介したように、教育哲学者のジョン・デューイの思想が体現されているかのような内容になっており、まさに“Learning by Doing”の発想に裏打ちされた作りになっている。昨日は、第一章の課題を実際に自分の手を動かしながら取り組んでいた。

一つ印象に残っている課題として、活用できる音階に制限を設け、その制限の中でいかに自分が表現したいリズムを生み出していくかというものがあった。その課題に取り組みながら、制限があることが逆に創造性を育む契機になりうる、ということに気づいた。

突飛な考え方もかもしれないが、真の創造性は自由から生まれるというよりも、制限から生まれるのではないか、という考えすら芽生えてくるような体験であった。もし仮に、自由というものが全てからの解放であり、そこに無しかないのであれば、創造性というものは生まれないのではないかと思わされた。それぐらいに、制約や制限というのは、ある種、創造性を刺激し、自分の内側のものを外側に形として表現するために、なくてはならないものなのではないかと思ったのだ。その課題で課せられた制約に忠実になりながら、私は、表現を待つものを音の形にしていった。

その実践に没頭した後に、制約と自由は表裏一体の関係にあることに気づいた。制約があることによって、私は自由に自分の表現したいものを表現することができたことに気づく。そうした自由な表現を担保しているのが制約だった。仮に、制約がなければ、そうした自由が生まれることはなかったように思う。

一方、そもそも自由という概念が生まれるためには、自由と対の概念が存在していなければならないことにも気づかされる。それが制約なのだろう。つまり、自由が存在するためには制約が存在していなければならない、制約が存在する場所には自由が存在するのだ。両者の表裏一体の関係は、昨日の作曲実践の体験からすると、極めて明確なものだった。

自由と制約という概念そのもの、そして両者の関係性については、これからの作曲実践によって幾度となく考えさせられるだろう。2017/6/22

1206. ヴァン・ダイク教授との面会より

今日は少しばかり蒸し暑い一日だった。基本的にフローニンゲンは、夏でも涼しく、湿度も高くない。しかし、今日は湿度と共に気温も高い一日だった。実際に、最高気温は30度まで到達していた。室内で仕事をしている時には暑さが全く気にならなかったのだが、午後から大学の学生支援課に行く必要があるために自宅を出ると、その暑さを肌で実感することができた。九月から始まる二年

目のプログラムに向けて、幾つか確認しておきたいことがあったため、私は学生支援課に行く必要があった。

予想以上に素早くその回答が得られたため、マライン・ヴァン・ダイク教授との面会の前に、私は社会科学キャンパスの図書館に立ち寄ることにした。図書館のコンピュータールームに到着すると、最終試験の時期の混み具合が嘘のように、そこにいる学生は少なかった。ただし、いつもこのコンピュータールームで勉学に打ち込んでいる若い中国人男性が今日もそこにいた。私は、この夏期休暇の間に読むための論文を50本ほど印刷をした。

おそらく、それらの論文を今日から10日間ほどの時間をかけて一読したい。論文以外にも、課題図書としてすでに書齋の本棚にある書籍と七月中に注文する書籍があるため、本日印刷したものについては、できたら七月に入るまでに読み終えておきたいと思う。無事に全ての論文を印刷した私は、時計を確認すると、ヴァン・ダイク教授との面会の時間が近づいてきていることを知った。コンピューターからログアウトし、私は図書館を後にして、ヴァン・ダイク教授の研究室がある三階に向かった。

ヴァン・ダイク教授の研究室は、私がお世話になっていた論文アドバイザーのサスキア・クネン教授の研究室と眼と鼻の先にある。クネン教授の研究室の前を通り過ぎた時、いつもは半開きになっている研究室のドアが閉まっており、先生は休暇中であることを思い出した。

ヴァン・ダイク教授の研究室に到着した私は、簡単な挨拶をしてから、教授が先日サンフランシスコで参加していた「ジャン・ピアジェ学会」についての話を伺った。なにやらこの学会は、私が思っていたよりもこじんまりした規模感のようであり、参加者は100人ほどだったようだ。

主に認知的発達をテーマにした研究の発表が多く、中にはピアジェを熱心に崇拝する昔ながらの発達心理学者もいたようだ。しかし、ヴァン・ダイク教授曰く、取り上げられた研究手法については、伝統的なもののみならず、ヴァン・ダイク教授のプレゼンテーションのように、ダイナミックシステムアプローチを活用したものも受け入れられているようだ。

また、この学会は、その規模感のおかげもあるだろうが、参加者同士の関係性が親密ということも聞いた。そこから私は、人間発達や教育に関する国際学会の中で、ヴァン・ダイク教授がこれまで参加して有意義だったと感じたものについて幾つか紹介してもらった。合計で11個ほどの学会を紹介

してもらったのだが、どれも私は聞いたことがなく、ただしヴァン・ダイク教授曰く、それらは人間発達や教育に携わる研究者であれば必ず過去に一度は参加しているものらしい。

中でも、今年の八月末にユトレヒト大学で開催される「欧州発達心理学学会」は非常に関心があったが、すでに論文発表の締め切りが終わっているとのことであり、今回はこの学会に参加することを見送ることにした。というのも、もはや私は、単なる一人の聴衆として学会に参加することをやめ、仮に学会に参加するのであれば、必ず発表者の一人として参加しようと思っているからである。そうなると、次に参加するのは、アムステルダムで来年に開始される「ジャン・ピアジェ学会」か欧州のどこかの国で開催される「国際非線形科学学会」になるだろう。2017/6/22

1207. サンタクロースを信じる多くの大人たち

マライン・ヴァン・ダイク教授との面会を終えた私は、足早にキャンパスを後にした。というのも、ヴァン・ダイク教授が面会の最後に教えてくれたように、これから天気が一気に崩れ、雷雨に見舞われるとのことだったからだ。キャンパスから自宅に近づくにつれ、天候がどんどん怪しくなっていた。幸いにも、雷雨に見舞われることなく、自宅に到着することができた。

自宅に戻ってから数十分後に、激しい雨が降り始めた。久しぶりにこれほどまでに激しい雨を見たように思う。その激しさがあまりにも珍しかったからか、私は思わず書斎の窓に近づいていき、窓から外の様子をしばらく眺めていた。激しい雨が窓や地面にぶつかっていく姿は、何か爽快感をもたらすかのようであった。

このような雷雨に見舞われながらも、現地のオランダ人は傘をさすこともカッパを着ることもなく、自転車を漕いで各々の目的地を目指していた。しばらく景色を眺めた後、再び書斎の机に着いた私は、所与の物語を検証する眼と思考力の重要性について考えを巡らせていた。

私たちは誰しも幼少の頃、サンタクロースの存在を信じていたであろう。そうした時期というのは、おそらく、ピアジェの発達理論で言えば、具体的思考段階の初期に該当するだろう。この時期においては、サンタクロースが存在するという物語を盲目的に信奉することになる。そこから思考力が育つてくると、いつの間にやら私たちは、サンタクロースなど存在しないことに気づく。

つまりここでは、これまでの物語からの脱却が起こっているのだ。この例は、一見すると微笑ましいものに映るだろう。しかし、実は私たち成人の誰しものが、何らかの物語に組み込まれ、その物語に盲目的な形で日々の生活を送っていることを認識しなければならない。とりわけ、社会の隅々にまで浸透している経済原理によって構築された物語は、非常に巨大な影響力を持っている。

そして、成人の多くは、その物語の構造に対して盲目的であることはおろか、その物語内容に対しても盲目的である。その結果として、私たちの成長を既存の経済原理の枠組みの中で捉えてしまうことになり、安易に量的な成長を求めたり、早急かつ効率的な成長を求めることになってしまう。

また、自己実現なる概念も、結局は既存の経済原理に縛られた物語を通じて捉えてしまうがゆえに、真の自己実現とは相容れない方向に向かってしまうことになる。現代社会を取り巻くそうした物語の内容と構造を冷静に捉えている人は少なからず存在しており、そうした人から見れば、既存の物語を盲目的に信奉している人は、サンタクロースを信じている子供と変わらないとみなすであろう。

まさにその通りなのだ。基本的に私たちは、自分が信奉している物語の内容と構造に自覚的になることは、極めて難しいのだ。だが、真に内面の成熟へ向けて歩むのであれば、現在信奉している物語の内容と構造を隅々まで暴き出さなければならない。認識の光によって、物語の内容と構造を炙り出さなければ、いつまでたっても所与の物語から脱却することなどできないのだ。

とりわけ、現代社会を取り巻く物語は、社会の隅々にまで広く深く浸透しており、それが巧妙に隠蔽されているという特徴を持つがゆえに、私たちはよほど真剣に自分たちを取り巻く物語がどういったものなのかを考えなければ、そこから脱却することなどできないだろう。

サンタクロースの物語があるときまでは真だと思えるところから、いつしか偽だと気づくことに至る現象というのは、実は成人期においても通過しなければならないことなのだ。

嵐のような激しい雨が過ぎ去り、辺りに鳥の鳴き声がこだましている。先ほどの落雷がまるで嘘のようである。2017/6/22

1208. 記号に呪縛される私たち

今朝、起床してみると、昨日の暑いとも言えるような一日が嘘であったかのように、とても涼しい世界が広がっていることに気づいた。夏を迎えてからは、リビングの窓を開け、寝室のドアを開けて寝ているため、リビングの窓からひんやりとした空気が流れ込んでくるのがわかった。しかし、夏を迎えたにもかかわらず、寝室の窓を開けて寝ることはない。

一つには、フローニンゲンの朝と夜は気温が低くなるからである。また、近所はとても静かな環境なのだが、私の就寝時間は他の人よりもかなり早いため、入眠に向かう最中に近所の物音が聞こえてくるのを防ぐためでもある。今日からは、再び気温がいつもどおりに戻り、涼しい気温がこの先一週間は続く見込みである。

昨夜は、特に何の夢も見なかった。だが、その代わりに、夢を見ない深い睡眠状態の中で、私は大きな気づきをいくつか得ているようだった。早朝未明に一度目を覚まし、自分が非常に重要な気づきを得たことを知った。その場で日記に書き留めているとばかり思っていたのだが、それは半覚醒の意識状態における誤解だった。

それらの気づきが何であったかを具体的には覚えていないが、眠りの意識を通過することによって、自分の内側の全てのものが再構成され、起床直後に何かしらの文章を書くことの意義を実感していたのは確かだ。今実際に、起床直後にこのように文章を書いているのも、そうした意義を強く実感したからだろう。

睡眠状態の意識を挟むことによって、再構成のみならず、そこから新たなものが生み出されるという再創造のような現象が生じていることもわかる。これまで、起床直後に日記を書き留めるということを行っていたが、今日からはまた、その意義を強く認識する形でそれを行っていくことになるだろう。

昨日、教育哲学者のインナ・セメツキーの示唆に富む論文を読んでいる時、チャールズ・サンダース・パースの記号論に立ち返る機会があった。一昨年、日本に滞在していた時に、パースの全集“The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings (1992)”の第1巻と第2巻を一読し、それ以降、パースは私にとって重要な哲学者となった。

パースは、この世界の全てのものが記号であるという発想を持っている。ただし、記号として解釈されなければ、それは記号ではない、という発言も付け加えている。この発言を思い出した時、私は一昨日の不気味な夢について振り返っていた。夢の中は、言葉と言葉にならない記号で溢れている。

パースの考え方を採用すれば、それらの無数の記号を私が記号だと認識した瞬間に、それは何らかの意味を持つ記号となる。そのように考えてみると、夢を構成する無数の記号のうち、それらの中で私に記号だと見なされたものはごくわずかに過ぎないことを知る。それぐらいに、夢の世界には、記号として認識されることを待つもので溢れているのだ。そして、これは何も夢の世界の中だけに限らず、私たちの社会そのものが、無数の記号で溢れかえっていることにも気づく。

この社会には、私たちが記号だと気づかない記号が私たちに多大な影響を与え続けていることに考えを巡らせていた。とりわけ、社会の発想の枠組みというのは、本質的に記号なのだが、私たちの多くは、そうした記号体系に盲目的であり、記号に呪縛されるという事態に陥っている。

パースが指摘するように、記号は他の記号と相互作用をなすため、社会の発想の枠組みという記号と、私たちの脳や精神という記号は、必然的にお互いに影響を与え合うことになる。つまり、社会の発想の枠組みは、不可避的に私たちの脳や精神を形作ることにつながるのだ。そのようなことを考えていると、この世界がどのような記号で成り立っているのかに対する意識をより明確にしていくことは、不用意に記号に呪縛されることを防ぐための第一歩だと気づく。2017/6/23

1209. ライデン訪問記:「スピノザ記念館」を訪れて

昨日は、一昨日のライデン訪問について多くの日記を書き留めていたにもかかわらず、それでも書き切れないことがいくつか残っていた。その一つは、スピノザ記念館を訪問したことについてである。国立古代博物館を後にした私は、その近くの古書店に足を止め、二つの貴重な文献を購入することになった。そこで長居をしてしまったため、古書店を出発した私は、足早にスピノザ記念館に向かった。

古書店からスピノザ記念館までは、歩いて一時間ほどであり、バスが運行していることも知っていたのだが、私はライデンの街を歩いて見て回りたいと思っていたため、結局、歩いてスピノザ記念館

に向かうことにした。その日のライデンの気温は高く、歩いている途中から汗がこぼれてくるようになった。記念館に向かうまでの道なりに、小洒落た家々が立ち並んでおり、街路樹の木々と見事な調和をなしているように思えた。

街の作りとしても、やはりフローニンゲンとはどこか異なっており、それが新鮮であった。終始辺りを見回しながら歩いていると、無事に目的のスピノザ記念館に到着した。ウィーンにあるベートーヴェン記念館「ハイリゲンシュタットの遺書の家」と同じように、閑静な住宅街の一角に、ぽつんとスピノザ記念館がたたずんでいた。それは、低い二階建ての家であり、大きさはとてもこじんまりとしたものだった。

道沿いの壁にプレートが立てかけてあり、スピノザ記念館だということが一目でわかった。しかし、入り口らしきドアがあるのだが、それは外から開けることができず、家を一周する形で入り口を探した。すると、中庭にスピノザの銅像が置かれていることに気づいた。銅像の周りには、緑が生い茂っており、銅像に近づこうとすると、銅像の横の草に蜘蛛の巣が張られていることを目撃した。

私はしばらくその場にたたずみ、この家で思索活動に打ち込んだスピノザについて思いを馳せていた。短い時間が過ぎた後、私は帰りの時間が迫ってきていることを思い出し、我に返った。そして、その瞬間までの我はどこにいたのか？我を感じていない時の我は何者なのか？という疑問にぶつかった。その疑問を抱えながら、私はスピノザ記念館をもう一周し、ある窓の外から内側を覗くと、館長らしき人物がいたので、窓を叩き、入り口は表のドアなのかを示すジェスチャーを示した。

すると、館長は笑顔で頷いたので、私は再び表の入り口に向かった。やはり、最初に入り口だと思ったドアから記念館に入るようになっており、館長が内側からドアを開けてくれた。後から知ることになったが、先客としてトルコ人の夫婦の哲学者が館内を見学しており、館長は二人に館内を案内することで手いっぱいだったようだ。私が記念館に入ってから、館長は二人の案内を続けており、「入館料の支払いは後でいいので、ゆっくりと館内を見ていてください」と私に伝えた。

その言葉に従い、私はゆっくりと展示資料を見て回った。ここは小さな記念館であるがゆえに、展示資料はそれほど多くないのだが、「スピノザ研究者にとっての聖地だ」と後から館長が指摘するように、スピノザゆかりの貴重な資料が所蔵されている。中でも私は、一つの展示資料の中にあつた、「彼

は自らの言葉を紡ぎ出すことによって神を生み出し続けた」という、アルゼンチン人作家ホルヘ・ルイス・ボルヘスがスピノザを表現した言葉が強い印象を私に与えた。

その言葉が、私の内部に静かに染み渡っていくのを感じていた。その後、スピノザが思索活動に打ち込んだ書齋に行き、スピノザが実際に読んでいた書物が陳列された本棚を見つけた。本棚のガラス越しに、時の経過を知らせるような重みを感じた。ガラスの向こう側に陳列されている書物は、重厚な響きを放っているように思えた。

一階に所蔵されている資料を全て見た後、私は二階に行くために古びた階段を上った。二階に到着すると、それは屋根裏部屋と形容できるほどの大きさであった。そこで展示されていた資料の一つに、アインシュタインの自画像があった。後から館長に話を伺ったところ、アインシュタインはスピノザを敬愛しており、毎年この記念館を訪れていたそうだ。

また、アインシュタインは実際に、駆け出しの物理学者の頃、ライデン大学に在籍していたことがあることを思い出した。きっとその時のアインシュタインは、この記念館を度々訪れたのだろう、という想像をしていた。

トルコ人の哲学者夫婦が去った後、私は館長から一対一でスピノザについて、そしてこの記念館について話を伺う機会を得た。ただし、帰りの時刻が迫っていた都合上、長居をすることができなくて残念であり、来年またこの記念館を訪れる旨を館長に伝えた。

私は決してスピノザ研究者ではないのだが、ライブニッツと同様に、スピノザには何か私を引きつけてやまないものがあり、記念館で販売されていた五つの論文集——“Leibniz and Spinoza,” “Spinoza Research: To Be Continued,” “Spinoza and the Idea of the Secular,” “Spinoza as an Economist,” “Points of View and the Two-Fold Use of the Principle of Sufficient Reason in Spinoza”——とデン・ハーグの街とスピノザの関係がわかる書籍を購入することにした。

帰りはバスに乗車しようと思っていたため、その時間が迫っていることに気づいた私は、館長にお礼を述べ、論文集と書籍をカバンにしまうことをしないまま、走ってバス停に向かった。

改めて一昨日のことを振り返ると、やはりもう一度、スピノザ記念館をゆっくり訪れたいという思いが込み上げてきた。どうやら館長は、来客の一人一人に館内の案内をしているらしく、ぜひ次回にまたゆっくりと話を聞かせて欲しいと思った。この夏、スピノザという存在は、私にとって少しずつ近い存在になっていくだろう。2017/6/23

1210. 発達・学習と無意識: インナ・セメツキーの論文より

起床直後のフローニンゲンの空は、薄い膜がかかっているかのように曇っていた。今日は、午前中の仕事を終えたらランニングに出かけようと思っていたため、天候が少しばかり気になっていた。昨日は雷雨に見舞われたがゆえに、その印象が私の内側に残っていた。天気予報を確認すると、今日は雨が降ることはないということだった。

早朝に、教育哲学者のインナ・セメツキーが執筆した洞察に溢れる論文を読んでいた。タイトルは非常にシンプルであり、“Learning from the Unconscious”というものだ。

私が初めて、無意識が学習に果たす役割と意義について自覚的になったのは、ジョン・エフ・ケネディ大学に留学していた頃だったように思う。「非日常意識」というコースを履修していた際に、クリストファー・バチェの“The Living Classroom: Teaching and Collective Consciousness (2008)”が必読書となっており、その書籍から大きな感銘を受けた。また幸いにも、そのコースを担当していた教授とバチェが知り合いであったことから、コースの最終回にスカイプを通じてバチェ本人と話すことができた。バチェの書籍から、学習にふさわしい集合意識をいかに学習者と構築していくか、ということ学んだように思う。

学習は教室空間の中だけで完結するものではなく、教師と学習者が構築した集合意識の中で絶えず行われるものなのだ、という気づきを得たことが懐かしい。セメツキーの論文を読みながら、バチェの書籍の内容についてそのようなことをふと思い出した。

セメツキーのこの論文の中で最も印象に残っているのは、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズの学習観である。それは、「学習観」と言うよりもむしろ、「人間の意識の発達観」と述べた方が正確かもしれない。

私が毎日、自分の夢について書き留めていたり、日々の雑多な思念や感覚を文章の形に記録していることの新たな意味がもたらされたように思う。「全ての人間は発見されるべき内的宇宙をそれぞれ持っている。しかしそれは、辿ることを通じて発見されるものなのだ」というドゥルーズの言葉は、大きな共感と共に、この言葉の持つ洞察の深さにハッとさせられるものがあった。

確かに私たちは、各人固有の内的宇宙を持っているのだが、それは生涯発見されることなく、私たちの意識の深層に眠ったままになっていることがほとんどだろう。なぜだか私は、奇妙なほどに、自分の内的宇宙はどれほどまでに開くのか、ということに多大な関心を寄せている。また、現段階における自分の内的宇宙の様子や構造がどのようなものなのかに対して、恐ろしいほどの関心がある。そうした関心を満たすために、私が採用した手段は、現時点で見ることのできる自分の内的宇宙を文章で記述していくことだった。

これを行えば行くほど、不思議な現象が自分を襲うようになった。それは超常現象のようなものでは決してなく、内面宇宙の絶え間ない生成に触れるような感覚である。そのように絶え間ない形で次々と浮かび上がってくる思念や感覚を捉えれば捉えるほど、少しずつ自分の内的宇宙の姿を把握できるようになっている気がする。これはもちろん気のせいかもしれないが、確かなことは、発見を待つものが発見されたという実感が私にもたらされているということである。

ドゥルーズが指摘するように、人間意識の発達は、ひょっとすると、辿ることの中にあるのかもしれない。ここ最近の私にはどうも、発達というものが、無意識に触れる形で、無意識を通じてなされるようなものに思えて仕方ないのだ。2017/6/23

【追記】

この日記は今の私にとっても非常に大切なことを述べているように思う。ドゥルーズの指摘するように、内的宇宙の真実は辿ること、すなわち探求を通じて発見されるものである。私たちは外面宇宙の深さには畏怖の心を持ちやすいが、自らの内面宇宙の深さに畏怖の心を持つ人は少ない。

自分に固有の宇宙の深さを知るには、その深さを知ろうとする努力が必要になる。それはこれまでの日記で何度も述べているように、自分の内面宇宙の現象を外側に形にすることでしか成し遂げられないのだと思う。これは本当にそうとしか言いようがない。自己の内面宇宙を深く開拓した者たち

は一様に、内側のものを外側に形として表している。内面宇宙というのはつくづく創造によって開いていくものなのだとすることを改めて思う。フローニンゲン:2018/6/28(木) 15:19

1211. ブラックスワンとバグ:個人と集合の発達に不可欠なもの

昨日、マライン・ヴァン・ダイク教授との面会を済ませた私は、社会科学キャンパスを後にし、自宅に向かっていた。キャンパスから自宅に戻る時は、いつもノーダープラントソン公園を通ることになっている。ここは市民の憩いの場所であり、四季折々の変化をそこにいつも見て取ることができる。今の季節は初夏ということもあり、青々とした緑が公園内に溢れ、晴れの日には、太陽の光が美しく池に反射する。そして、大きな池を囲む芝生には、人々がシートの上に横になり、とても平穏な世界がそこにある。

昨日、天気が下り坂に向かっていることを確認した私は、足早に公園を横切っていた。大きな池の前に差し掛かった時、普段は池の中に浮かんでいることが多いアヒルたちが、池の外にたたずんでいた。たたずむアヒルたちを見ていると、色や大きさを含め、一羽一羽のアヒルが様々な個性を持っていることがわかった。

すると私は、個人は自己の内側に「ブラックスワン」を持つことが大切であり、それを育むことがさらに重要なのだと思った。ここで述べているブラックスワンとは、金融の世界で元来用いられている意味とは異なるかもしれないが、自己の中にある予期せぬ形で生まれた異質な特性のことを指す。

私たちの多くは、そうした特性に気づかないか、あるいは、それに気づいていたとしても、それを育む手段が分からなかったり、あるいはそれが異質なものであるがゆえに、それを排斥しようとしたり、抑圧しようとしたりする傾向がある。しかし、私たちが人格的にも能力的に成熟を遂げていくときに、こうした異質な特性は極めて重要な存在となる。

以前の日記で書き留めていたように、私たちの人格や能力を一つの生態系と見立てると、その生態系が持続的な成長を遂げていくためには、生物多様性を確保しなければならない。仮に、私たちがそうした異質な特性を排斥し、抑圧するようなことがあれば、生態系全体が危機に瀕してしまうだろう。これは個人だけに当てはまることではなく、組織や社会においても当てはまる。つまり、組織や社会という生態系が持続的に成長していくためには、ブラックスワンが必要なのである。今、私は

ここで、ブラックスワンという言葉を用いたが、これはコンピューター上における「バグ」と言ってもいいだろう。

先日、長らくプログラミングに携わっていた方から大変興味深い話を伺った。それは、映画マトリックスにおける主人公は、マトリックスの世界の中におけるバグであり、そのバグがマトリックスの世界に調和をもたらし、その世界を救済する者として扱われているということだった。まさに、これは社会の発達の本質を突いているように思える。仮に、バグが存在しなければ、マトリックスの世界は均質的となり、その世界が一段高次元の世界に発達していくことはなかったはずである。

その方の話を聞きながら、私は映画の内容を回想し、個人や集合の発達について考えさせられることが多々あった。個人が自身の人格や能力を育てていくというのは、自分の中にあるブラックスワンやバグを保持し、それを育てていくことと不可分であり、組織や社会が個人を育てていく際にもまさに同様のことが言えるだろう。

池の前に不揃いに並んでいるアヒルたちは、きっと自分固有の異質な特性を大切に保持し、それを自然と育てていったのだろう。これが自然の姿であり、そこには異質な多様性が溢れている。なぜ私たち人間は、自己や個人の異質性を均質化しようとするのだろうか。2017/6/23

1212. 夢の世界から無の世界へ

アムステルダムスキポール空港からパリ＝シャルル・ド・ゴール空港に飛び立ち、早々に成田空港に到着した。成田空港から外に出た瞬間、寒々とした空気がそこに漂っていた。しかし、空はからっとした快晴であり、どうやら冬の成田に私はいるようだった。行き先のわからないバスが目の前に到着し、私はスーツケースをバスの運行係に預けようとした。

その時、冬独特の光を放つ太陽が、妙に私の心の奥深くに入ってくるかのようなようだった。スーツケースを預けた時、快晴の冬空に目をやると、自分は一人だという寂寥感の入り混じった感覚が到来した。そのような夢を昨夜見た。

早朝、目覚めてみると、今日は久しぶりに、太陽光に出迎えられる形で起床することができなかった。空はどんよりとした雲に覆われており、窓には水滴が付着していたことから、昨夜の未明の時刻に雨が降っていたことがわかる。

昨日、天気予報を確認すると、今日は終日雨模様ということであったから、今日の前に広がる光景は予期できていたと言えそうである。だが、思考の中でそれを体験するのと、実際に自分の身体を晒す形でそれを体験するのとは、大きな感覚的相違がある。これは不思議な現象であり、天気に関しては、そのような違いがあるが、夢の中においてはそのような差異は消失する。夢はある種、思考の産物や想像の産物とみなすことができると思うが、そこで展開される光景を目撃している時の自分は、感覚的にもそれを実際に体験しているかのようなのだ。

つまり、想像の産物であるはずの夢は、下手をすると、現実よりも現実的な感覚を私に引き起こすのだ。こうなってくると、夢を想像の産物と片付けることはできなくなってくるだろうし、逆に、今日の前に広がる雨雲を見ている際に喚起される感覚を現実的なものだと捉えることは、非常に浅薄な判断のように思えて仕方ない。

そのようなことを考えていると、再び私の意識は夢の中に戻ろうとするような動きを見せた。この偶発的な動きに従う形で、私は再び昨夜の夢を回想していた。そういえば、夢の中で私は、手荷物を受け取るためのコンベアの前で、ある一人の女性と会話をしていた。その女性は、どうやら知人の到着を待っているようであり、その知人は夜に成田空港に到着するそうだった。それを聞いた時、その知人が日系の航空会社ではなく、他国の航空会社を利用していることが一瞬でわかった。

それに気づいた時、私は夢の世界から無の世界に飛ばされ、人間も物も何も無い世界の中で、英語をひたすらに話し続けていた。一つ一つの言葉の質感を確認しながら話すような英語であるのと同時に、時折、無意識に任せて言葉を自発的に発するような英語だった。

この無の世界も、夢の世界の一つなのだろうか。夢の世界の奥の奥にある、夢を生み出す場所のようなところに私はいたように思う。その根源的な無の世界にしばらくいた感覚が、覚醒後の今も、少し自分の内側に残っているかのようなのである。2017/6/24

1213. ミサ曲の感動と型について

深く静かな感動に私は包まれていた。このところ、仕事をする際には、絶えずモーツァルトの協奏曲を聞いている。毎日、14時間ほど延々とモーツァルトの協奏曲を聴いている私の心は非常に落ち着いており、それもあってか、全ての仕事の一つの統一的な規律の中で営まれていることがわかる。ここしばらくは、ベートーヴェンのピアノソナタからは離れ、そのような音楽生活を送っていた。

昨日、偶然ながら、ガストン・リテーズという盲目のフランス人オルガニストの存在を知った。早速、リテーズの幾つかのCDをダウンロードし、今朝一つのCDを聴き始めた。それは、“Messes des paroisses avant”というものだ。このミサ曲が、早朝の私の心を打った。

これまで私は、オルガンの魅力を自分の芯から体感したことがなかった。だが、今朝の私は、オルガンの音が到達しようとする崇高な世界に触れるような感覚があった。いや、オルガンの音に導かれて、崇高な世界に自ら参入していくような感覚があったのだ。オルガンの音と人間による歌の組み合わせが、自分が人間であるという確かな自覚をもたらし、人間は人間を超えた世界に参入する存在なのだということを知らせるかのようであった。

このミサ曲を聴く時、なぜバッハがオルガン曲を作曲し続けたのかという理由を知り、カトリック教会がなぜミサ曲を大切にしているのかという理由の一端を理解したように思った。オルガンの音と人の歌声が、深く自分に染み渡り、そこからまた駆け上がる気流のような感覚が自分の身体を通り抜けていく。

しばらく私は、リテーズのオルガン演奏とそれに付随する名の知れぬ人たちの歌声に耳を澄ませていた。そこから私は、昨日の作曲の学習と実践について振り返っていた。今の私は、作曲をするための型を一つ一つ学んでいる段階にあり、改めて型を着実に習得していく重要性を実感していた。以前の日記で書き留めていたように、型というのは、表現を制限するような容器ではなく、むしろ自由な表現を可能にするための媒介物なのだと思う。

制約と自由は一对の概念であり、制約がなければ自由はなく、自由があるところには制約が不可欠なのだ。ここで言う制約には、否定的な意味合いは含まれていない。まさに、自由を実現するために制約があり、作曲における型というのはそのような制約のことを言うのだと思う。そのようなことを思

うとき、日本の高等教育において、なぜ文章を書くということに関する型を教授しないのか、という疑問と不満が生まれた。

一部の高校や大学では、文章を書くことの型を習得するための教育が提供されているのかもしれないが、私たちの多くは、そのような型の習得機会を得ることはほとんどないのではないかとと思われる。私自身、25歳の時に米国の大学院に留学して初めて文章を書くことの型を習ったように思う。

それはもちろん、英語による論文を執筆するための型であり、そのように考えてみると、私は、日本語で文章を書くことに関する型を一切学んでこなかったことに気づかされる。確かに、これまで日本で受けてきた教育の中に、文章を書く機会は幾度なくあったが、そこには、文章を執筆することの作法に関する鍛錬が圧倒的に欠落していたように思う。これは、私のみならず、多くの日本人に当てはまることではないだろうか。そうであれば、日本人はどうやって真つ当な日本語の文章を書くことができるのだろうか。2017/6/24

1214. マルチフラクタルトレンド除去変動解析と埴谷雄高著『死霊』

今朝は少しばかり早く起床したためか、午前中の仕事の合間を縫って、先ほどソファの上に腰掛けながら、しばらく目を閉じていた。およそ10分ほどであろうか。目を閉じていると、夢の世界の入り口の前にたたずんでいるような感覚に包まれた。実際に、言葉にならないような映像が自分の脳裏に浮かんでおり、私はそうした映像の世界の中にいた。

子供と親が登場するような映像であり、その他の情景や一切のストーリーは不明である。あるところでふと目を開けた。すると、目を閉じる前と同様に、書斎の中にはモーツァルトの協奏曲が静かに鳴り響いていた。今日は早朝から、楽曲の構造分析に非線形ダイナミクスの手法を活用した論文を五つほど読んでいた。

その中で、トレンド除去変動解析から派生した応用的な手法、「マルチフラクタルトレンド除去変動解析」という手法を度々目撃することになった。この手法については、これまで一度も目にしたことがなく、発達科学の領域において、この手法はまだそれほど活用されていないのではないかと考えた。

この手法の全貌をすぐに理解することは難しかったが、今後の発達研究の際に活用出来るかもしれないという期待があった。そこで、先ほど読み進めていた論文の中で引用されていた、マルチフラクタルトレンド除去変動解析の解説に特化した物理学の論文を一つほどダウンロードした。

午前中にそれらの論文を読んでいると、昨日の作曲実践について思い出された。昨日は、少しばかり意図的に、五線譜上の音符の配置のさせ方を起伏に富む形にしようとしていた。つまり、適度な変動性を伴うピンクノイズの波形をイメージしながら、うねるような音符の配置を意図していたということである。偉大な作曲家の曲を眺めてみると、読み進めていた論文の実証結果が明らかにしているように、曲の構造に適度な変動性が確保されていることがわかる。

そこで私も、いくつかの小節を通じて、変動性が保たれるような形で音符を配置した。しかし、私の技巧が不十分なため、曲を再生した時に、それほど心地の良い音として感じることはできなかった。だがその後、何度か同様の実験を試みていると、心地の良い音を発する少数の節を生み出すことができた。ここでふと、昨日読んでいた非線形ダイナミクスを活用した楽曲分析の論文の中に書き留めていた、「科学的な作曲実践」を自分が試み始めていることに気づいた。

日々の生活の中で、科学的な探究に従事すればするほどに、バッハにせよ、ベートーヴェンにせよ、彼らは単なる作曲家ではなく、科学者であったとすら思えるようなことがある。彼らは科学的な精神を持った作曲家だったのだ。それは、彼らが美を生み出すための体系を生み出すことに苦心し、科学的とも言える発想と方法をもってして、その体系の構築に打ち込んでいたことから明らかだろう。これは美的体系のみならず、思想体系にせよ、知識体系にせよ、同じことが言えるはずである。そこにはある種、科学的な発想と探究プロセスが深く関係しているような気がしてならない。そして、そうした科学的な探究を促すのは、実存的なものだということ言うまでもない。

いくつか論文を読んだ後に、私は埴谷雄高著『死霊』を手に取り、この分厚い小説を読み始めた。これまでの続きとして、第三章「屋根裏部屋」のページを開き、食い入るようにそれを読み終えた。この小説は私にとって、相変わらず得体の知れない魅力を持っている。登場人物たちの会話は、時に自分の考えを代弁することがあり、往々にして私の思考の遙か先の世界について語っているように思えることもある。明日は、第四章「霧のなかで」を読み進めたいと思う。2017/6/24

1215. 倫理的・道徳的判断を迫る夢

昨夜の夢は、少しばかり不安感を煽るような内容だった。夢の中で私は、法律に関する自由記述式の試験の結果を受け取った。これは二回にわたる試験であり、初回の試験は10点満点、二回目の試験は100点満点であった。試験を受けている最中の記憶はなく、結果だけが返却される場面からこの夢は始まった。

初回の試験の結果は、7点であり、二回目の試験の結果は45点だった。この結果を知ったのは、試験の点数が試験番号ごとに羅列された一覧表を見たからである。その一覧表から、私は自分の試験番号である9番を探した。この表には、試験を受けた者の全ての結果が記載されており、私より一つ前の試験番号を持っている友人の結果が少し気になったのか、彼の結果を見た。

すると、初回の試験の結果が9点であり、二回目の試験の結果は43点だった。それを見たとき、友人の初回の試験の結果が極めて高いことに賞賛の思いを思ったが、その友人ですら、二回目の試験は難しかったのだと知る。

一覧表の全てを確認すると、後半に、極めて高い試験結果を残した人物がいることに気づいた。それは旧友の女性であり、彼女の得点は、初回が8点、二回目が70点だった。彼女に法律の才覚があることを初めて知り、それもまた一つの驚きであった。試験結果を確認すると、私は、この試験を受けた者たちが集まる部屋に向かった。

そこでは、試験作成者からの解説が行われることになっていた。驚いたことに、今回の試験を作成したのは、高校時代の友人だった。私がなぜ驚いたかという、その友人は、高校時代には勉強に一切力を入れていおらず、まさかこのような法律の問題を作成するような人間になっているとは想像がつかなかったからだ。

その友人が試験の結果について、「今回は非常に難解な試験だった」という言葉を発した。その言葉に続けて、今回の試験の合格ラインは、合計で50点以上あることを説明し、平均は52点とのことだった。私の合計得点は、まさに平均点だった。試験問題を作成した友人はさらに、合計得点が50点から60点であれば、1-10評価の最終成績において、5.5の成績が付されるということを説明した。

夢の中で私は、この成績評価の厳しさは、オランダの大学院のそれと匹敵すると思った。そのようなことを思っていると、試験問題を作成した友人が、突然英語で話し始めた。なにやら、試験問題の内容について解説しているようなのだが、私はその解説の内容よりも、友人の英語に意識を向けざるをえなかった。というのも、この友人がまさか英語を話すことができるとは思っておらず、彼がどの国で英語を習得したのか気になり、彼の発音から英語の習得した場所を推測しようとしていたからである。

しかし、そうした推測も思うようにいかず、彼が淀みなく英語を話している姿は、正直なところ、かなり不気味であった。そのような気持ちのまま、夢の第一幕を終えた。

夢の第二幕は、倫理的・道徳的判断を問われるような内容であり、夢の中の私をひどく悩ませた。夢の中の私は、ある劇場にいた。この巨大な劇場では、華やかな劇が上演されており、劇の最終章あたりに差し掛かっているところから夢が始まった。

上演されていた劇が終わり、観客が大拍手を開始した中で、私よりもだいぶ前の方に座っていた一人の人物が席を立ち、劇場を後にする姿を目撃した。よくよくその人物を見ると、それは私の友人だった。彼とはしばらく会っておらず、とても懐かしく思った私は、拍手の喝采が聞こえる中で、その友人に声をかけようとした。

しかし、その友人は私に気づいていないようだった。すると、友人は非常に真剣な表情のまま、ジャケットの中からピストルを取り出し、私とは反対側の列に座っていた一人の観客を撃ち殺した。ピストルの音は、観客の拍手によってかき消され、周りのいる人々は何も気づいていないようだった。殺害現場を目撃したのは、どうやら私だけのようだった。

私は、まさか友人がそのような行為をするとは思っていなかったし、そのようなことをする人物では決してないと思っていた。事の成り行きが一切つかめぬまま、私は観客の拍手の渦の中に啞然として立ちすくんでいた。拍手の喝采が静かに収束の方向に向かい始めた時、人々はその事件に気づいたようだった。殺害された者の周りにいる人たちは、悲鳴を上げている。

そうした悲鳴が他の観客を混乱させ、多くの観客が一斉に席を立ち、劇場を慌てて後にしようとし始めた。観客が劇場の出口に駆け込むようにして向かい始めた時、殺害を企てた友人はすでに出口

の付近にいた。そこで彼は一度後ろを振り返り、殺害現場と動揺する観客の姿を確認するかのよう
な仕草を見せた。彼の表情は、一切の感情が含まれていない、何とも形容しかねるものだった。

その表情に私は吸い込まれるようにして、場面が劇場から、純粋な思考のみが存在するような世界
に変わった。その世界で私は、事の真相を知っている自分が、この事件の犯人が友人であることを
報告するのかどうかという、倫理的・道徳的判断に苛まれていた。結局、判断を下せぬまま、私は目
を覚ました。2017/6/25

1216. 偉大な社会学者から

昨日の午前中は、あれこれと論文や書籍を読み、午後からは、二時間ほど書籍に関する対談をさ
せていただいた。普段と異なるのは、この対談だけであり、その他は常時読むことと書くことで構成
されているような一日だった。しかし、今朝の起床時に、いつもより一時間ほど多くの睡眠が必要だ
ということに気づいた。何かを回復させる必要性に迫られていた、と言えるかもしれない。

昨日に目を通して論文は、主に非線形ダイナミクスの手法を活用した楽曲の構造分析に関するも
のである。一方、読み進めた書籍の中で最も印象に残っているのは、“Masters of Sociological
Thought (1971)”だった。この書籍は、一昨年に神保町のとある古書店で購入したものであり、本書
を開くと、当時の様子がありありと思い出されるかのようである。この書籍は、社会学の発展に貢献
した13人の学者の仕事が紹介されており、600ページ弱の内容を持っている。

昨日は、フランスの社会学者オーギュスト・コントとカール・マルクスの箇所を読んだ。コントに関して
は、彼が発達論者としての観点を持つてることに驚かされ、それ以上に、ダイナミックシステム理論
に通じるような発想を持って社会現象を捉えていたことに驚かされた。マルクスに関しては、やはり「疎
外(alienation)」という概念が、妙に私を惹きつける。疎外とは、私たちが産み出したものが、私たち
自身から離れ、逆に私たちを支配するような現象を指す。

例えば、貨幣というのはその際たる例だろう。一体この言葉の持つ何が私を強く惹きつけているの
か未だ謎な点が多々あるが、私たちが産み出したはずの文化や仕組みが私たちから離れ、私たち
を支配するような現象に対して、私に関心を持っていることは確かである。また、より焦点を狭めると、
私たちが生み出した概念が、いつの間にやら私たちから離れ、私たち自身を縛るような現象にも強

い関心がある。これらの点については、より具体的な事例と照らし合わせながら考えを深めていきたいと思う。

また、マルクスの章を読んでいた時に大きな共感を受けたのは、彼が様々な苦難を抱えながら、ロンドンに移住した際の探究生活に関するエピソードだった。このエピソードは非常に有名なものであり、私も以前から知っていたのであるが、改めてその箇所を昨日読んだとき、感じるものがあったのは確かである。

この時期は、マルクスが主著『資本論』を執筆する前であり、まともな生活を送ることすら困難であったマルクスは、そうした状況の中でも探究活動を止めることなく、大英博物館の図書室に毎日朝から晩まで通い詰めた。この時期の探究が、それからおよそ10年後の『資本論』という作品に結実していく。探究者としてのこうした生き方に大きな励ましを受けるのは、現在の私がマルクスと同じような探究衝動を持って日々を生きているからかもしれない。今日は、本書の続きのハーバート・スペンサーとエミール・デュルケムの章を読み進める。2017/6/25

1217. バッハのシンフォニアより

早朝、日記を少しばかり書き留めていると、自分の文体が揺らいでいることに気づいた。文体を支える土台が揺れており、言葉に生命力のようなものが宿っていないことに気づいた。文体というのは、その人を映し出す鏡のような特徴を持っており、その人の本質的な特性を映し出すだけでなく、より表層的に、その人の今この瞬間における状態をも映し出すように思える。

先ほどの自分の文体には、どこか力がこもっていないような印象を受けた。今この瞬間に気づいたが、「文体」というのは、文字通り、「からだ」に他ならず、それは精神と密接につながっているものなのだと思える。

昨夜はいつもより短めに、作曲の学習と実践に励んでいた。“Composing Music: A New Approach (1980)”の第二章を全て読み終えたところで、午前中に読んでいた論文に記載されている、バッハのシンフォニアの楽譜の一部を思い出した。すると私は、その楽譜を作曲ソフトの五線譜上に再現したいという思いに駆られた。すぐにその楽譜を再現することを始め、実際にその曲を再生した瞬間、大きな感動に包まれた。

それは、小鳥が羽ばたく羽の連続的な音を想起させ、羽を小刻みに動かしながら飛翔に向けた準備をするイメージとそこから実際の飛翔へと至るイメージが、連続的な音の流れの中で想起されたのだ。私は、この曲を何度も何度も再生し続けた。バッハの作曲技法の崇高さに思わず感嘆の声が漏れた。

冗長な表現を一切許さず、単に「すごい・・・」という言葉だけが漏れた。正直なところ、このところ、ベートーヴェンのピアノ曲を型にして、自らの作曲技術を磨いていくことの難しさを感じていた。楽曲解釈の専門家からしてみれば、ベートーヴェンのピアノソナタ第一番は、それほど複雑なものではないとみなせるのだろうが、門外漢の私からすると、それは異常に複雑である。

こうしたことから、ベートーヴェンのピアノ曲から作曲の体系的な方法を構築していくことは難しく、ましてや美の創出方法をそこから汲み取るのはさらに難しいことであった。一方、この論文に記載されている曲のように、バッハが残した楽譜は、外形上それほど複雑ではないように私には思える。実際、私が感銘を受けたその曲は、その表面上の姿形だけであれば、私にも十分に作曲可能なものに思えた。それぐらいにシンプルな楽曲の中に、これほどの美を具現化させることのできたバッハは、やはり偉大な作曲家だったのだと思う。

もちろん、バッハの曲の中には複雑なものもあるだろうが、バッハの曲を参考にしながら、自分の作曲技術を高めていくことが望ましいように思えた。この感覚は、実はモーツァルトの曲に対しても感じており、作曲の体系的な方法と美の創出方法に関しては、バッハやモーツァルトに範を求めるのが最善であるように思えてきた。バッハとモーツァルトの楽譜を購入し、この夏は、この二人の偉大な作曲家の曲を解析することを通じて、少しずつ自分の曲を生み出していきたいと思う。2017/6/25

1218. 夢とエジプト

昨日は様々なことを考えさせられるような一日だった。ここでは、その一つ一つを取り上げることをしない。というのも、それらの一つ一つが、自分の内側を真に通過し、大きなまとまりとしての言葉になっていないからである。それらが大きなまとまりとしての言葉の形になるには、しばらくの熟成期間が必要だろう。

今朝起床してみると、七月に入ろうかという時期を迎えているにもかかわらず、その寒さに少しばかり驚いた。昨夜は、寝室の窓もドアも閉めて就寝していたはずなのだが、室内の気温が下がり、寒さを感じさせる形で今朝は目覚めた。まとわりつく寒さと共に、昨夜の夢の印象が私を捉えていた。夢の中で私は、父から一通のメールをもらった。

そのメールは、全て英語で書かれており、何やら日記の書き方に関する内容だった。具体的には、日記の中で、他の研究者や学者の発言や仕事に言及する際には、学術論文の引用形式を採用すべきではないか、というものだった。なぜ父がこのような内容について、しかも英語でメールをしてきたのかは定かではない。だが、間違いないのは、その文体は父のそれであり、英語の節々から父の言葉であることが明確に伝わってきたということだった。

改めて考えてみると、日本語と英語に関係なく、このように、その人の文章から人となりが見事に分かるというのは、非常に興味深いことだと思った。あの英語を書けるのは、父しかおらず、そこには文体とその人物との完全な一致があった。ここに、その人の存在とその人が発する言葉との一致、特にその人の文章と存在が見事なまでに一致する姿を見たのである。文章の巧拙とは関係なく、一人の人間の文章は、欺くことができないほどにその人を表すということを見て取った。

そのようなことをまず思っていた。次に、日記における引用形式についてであるが、これは学術論文のような形で厳格に示す必要はないであろう、ということも思っていた。それをしてしまうと、もはや日記の体をなさないだろうし、書き手も読み手も、あまりに形式ばった姿に嫌気がさしてしまうだろう。そのようなことを思いながら、受け取ったメールの最後の文章を読み終えた。

そこで目が覚めると、父の英文メールに込められていた存在感のようなものが、依然として自分の内側に残っていた。文体には存在が宿り、それはどこか別の世界に刻印された、永遠に消えることがないもののように思えた。

起床直後、書斎に向かった私は、すぐに音楽をかけ始めた。昨日、上の階に住むピアニストの友人に勧めてもらったサン＝サーンスのピアノ協奏曲第5番「エジプト風」を聴く。それは、先日訪れたライデンの古代エジプトの印象を思い起こすには十分な曲であり、そこでの印象をより強く喚起させるような曲であった。エジプトに足を運ぶ日が、刻一刻と近づいているのを感じる。2017/6/26

自分の無能さと無知さを日々感じながら、自らを無能かつ無知な人間だと思おうとする自分と、そうした思いは無駄な思い込みであると思う自分が同居する中、これら二つの自分の折り合いのさせ方に苦心する自分が存在しているのが見える。当の本人である私は、この折り合いをつけようとする自分の苦心さに影響を受けやすいことに気づく。最初の二つの自分は確固たる不動心のようなものを備えており、各々の考えを譲ることをしない。

両者の考え方は、確かに極端な発想かもしれないが、この対極的な考えを失ってはならないような気がしている。そのように考えると、対極的なものに折り合いをつけようとする自分の存在が、一見すると真っ当な調停者のように見えるのだが、冷静に考えてみると、少しばかり不必要な存在に思えてきたのである。おそらく自己の全ての側面に何かしらの意味が内包されているであろうから、「不必要」という言葉は、少し語弊があるかもしれない。だが、その存在が持っている意味の度合いというものは薄く、対極的な二つの存在を統括するような役割を果たしきれていない。

おそらく今の私に求められるのは、この調停者としての自分を消し去ることではなく、この存在を育み、さらに成熟した調停者に変容させることだろう。つまり、活動の原動力を生み出すかのような両極の自分を共存させることを可能にする存在を新たに生み出していく必要があるようだ。そのようなことに思いを巡らさざるをえなかった。

昨夜の就寝前と今朝の起床直後において、日本社会への関与の仕方を考えている自分がいた。正直なところ、自分が日本語で書籍を書く意味などあるのだろうかという疑問に突き当たっている。この疑問を生み出している原因は、私の内側にあることは間違いないだろうし、私の行動の至らなさにあるだろう。だが、書籍を執筆するにせよ、いつその事、それを英語で行うことの方が意味があるのではないだろうか、という思いに揺らぐことが多々ある。

学術論文の執筆に関しては、この問題は自分の中では完全に整理されている。それを日本語でなそうという思いは一切ない。一方で、広く多くの人に人間の成長や発達に関する知見を共有する際にそれを日本語で行っていく必要性を感じながらも、それに対して少しばかり疑義を挟む自分がいる。おそらく、日本語空間の中に、人間の成長や発達に関する知見を共有していくことは何かしら

の意味があるのだと思いたいが、その思いを妨害する気持ちの方に振れることがしばしばあることを隠すことはできない。

人間の成長や発達を取り巻く日本の現状を見るにつけ、それは大きな問題意識を私に投げかけるのだが、そうした問題意識や危機意識に押し潰されそうになる自分があるのだ。そして、それがある種の諦めのような気持ちを自分に引き起こすことがある。この諦めの気持ちを超克していくような自分に変容していくためには、やはり冒頭の無能さと無知さに関する問題を乗り越えていく必要があるだろう。何ともしがたい気持ちを抱えながら、午前中の仕事を開始したいと思う。2017/6/26

1220. 生きること・探究することの根源

今朝、普段と同じように、朝食にリンゴを食べた時、いつもとは異なる色と味に対して、肯定的な意味で驚かされた。実は、色に関しては、昨日このリンゴを購入する時に気付いていたのだが、味に関してもいつもと異なるものだとは思ってもみなかった。これまでと同じ生産者が作ったリンゴを食べたのだが、季節が初夏を迎えたからなのか、色つやがこれまでのものとは異なり、特に味が印象的だった。それはまるで、洋梨のようなみずみずしさを含むものだった。

一口そのリンゴをかじった時、果汁が溢れ出しそうになるのを目にしなが、少しばかりリンゴの姿形に見入っていた。季節の変化に応じて、姿形、そして味までも変化させるリンゴについて、私はソファに腰掛けながら、あれこれと思いを巡らせていた。この一つのリンゴに詰まった物質的ではない何か、つまり精神的なものが持つ濃密さに対して、私は少しばかり神妙な気持ちになっていた。

サン=サーンスの美しい曲が、食卓を優しく包むように流れている。フランスが生んだこの偉大な作曲家の音楽を、昨日から少しずつ聴くようになった。まちがいなく、サン=サーンスが残した楽曲は、どの季節に聞いても私たちの内側で喚起させる何かがあるに違いないだろうし、特定の曲はある季節により合致するものもあるだろう。しかし、今私が聴いている曲のどれもが、このフローニンゲンの初夏の朝にふさわしいように思えて仕方ない。

それぐらい、この瞬間に流れているサン=サーンスの曲は、現在の私を取り巻く自然環境と合致していることがわかる。サン=サーンスの曲を聴いていると、早朝に考えていた考えをまた冷静に眺められるような気がしてきた。

今朝の私は、自分が日本語で今後書籍を執筆していくことの意義のようなものを感じる事が一切できなかった。第二弾の書籍が出てまだ間もないのだが、あの書籍を世に出したことが全くもって無駄だったのではないかと思うような、ひどく極端な発想に囚われていた。

書籍の中で書かれた事柄が、社会における既存の言説空間に対して何らかの寄与を果たし、読み手の実践的な営みをどれほど喚起するものなのかを考えたとき、ひどく絶望的な思いになった。結局、ものを書くということが、この世界にどれほど貢献を果たしうるのかという問題は、私を大いに当惑させる。

一人の個人が書く文章が持ちうる社会性について考えるとき、その社会性があまりに取るに足らないもののように思え、文章を書くことの意義がまた一つ遠のいていくような思いに駆られていた。そのような思いを抱えながら午前中を過ごした私は、昼食を摂り、メールを確認した。すると、書籍を読んでもらった一人の方から、一通のメールが届いていることに気づいた。その内容についてはここで一切言及しないが、あの書籍を執筆したことは完全に無駄ではなかったことを知った。

そして、何より私に励ましをもたらしてくれたのは、あの書籍を執筆した背景や執筆理由について、その方が私以上に深い理解を持っていたことだった。こうした方が日本に一人でもいる限り、自分が日本語で何かを書くことの意義が全くないわけではないことを知る。おそらく、その意義だけが、唯一日本と私を繋ぐものに違いないだろうし、私が母国に関与する唯一の道だと思う。その道が存在していることに対して、私は何とも言えない気持ちになった。

その方のメールの次に目を通したのは、非常に嬉しい知らせが記載された内容のメールだった。一昨年、私が日本に滞在している時に知り合った方に第二子が誕生するという知らせだった。それは全くもって他人事ではない出来事のように感じられ、新たな生命が誕生することの歓喜を私にもたらしめた。すると、自然と流れるべきものが私の目から流れてきた。

その方に、サン=サーンスの“Gloria Patri in D Major”を贈りたい気持ちになった。生き続けることの意味や探究を続けることの意味は、絶えず自己と他者との関係性の中に見いだすことができるということを、私は決して忘れてはならないだろう。2017/6/26